

異学年による制作・鑑賞活動のあり方の可能性について

美術科 西澤 明

1. テーマ設定にあたって

(1) 現状とここまでの実践のまとめ

研究における異学年間授業では、どうしても特別で実験的な取り組みになりがちである。そこで、今年度の異学年間授業を計画するにあたり、あらためて現状やこれまでの実践を見直し、その問題と可能性を整理することにした。

① 美術科の授業時数について

現行の教育課程における美術科の授業時数は、第1学年は45時間、第2学年、第3学年は35時間(学校教育法施行規則)で、基本的に週1時間の授業である。本校は各学年4クラスの全12クラスなので、3学年合計の授業時数は週12時間である。各クラスが異なる曜日、時間帯での授業になっており、1人の教師(一部非常勤講師)が担当している。

他教科との関わりもあって時間割の変更は難しく、異学年間で授業の「時間」、「場所」を揃えることは現実的には困難である。仮に異学年の授業を揃えることができ、同じ時間、同じ場所で共同活動が実現できる場合でも、多人数の活動に1人の教師で対応、指導するのは困難である。

② 美術科のカリキュラムについて

学習指導要領に示された美術科の目標は、「創造活動の喜び」、「愛好する心情」、「豊かな感性」、「基礎的能力」、「豊かな情操」といった抽象的なものであり、その実現のための具体的な内容については、「表現」と「鑑賞」の活動を通して「発想や構想」、「技能」といった能力を育て、伸ばすと示されている。しかしその内容については具体的な指針がないため、扱われる単元や実施時期については各学校や個々の教師によってさまざまである。

こうした状況は美術科における大きな問題点でもあるのだが、異学年間授業でどのような単元(教材)を取り上げるのかを考える際には逆に都合がいいとも考えられる。つまり、異学年間授業を計画する際に、決められたカリキュラムの中で共同活動に結びつけることが可能、あるいは取り上げることが望ましい単元や内容を考えるのではなく、異学年間の活動のよさや目的に合わせて授業内容や実施時期を計画、設定できるとも言えるだろう。

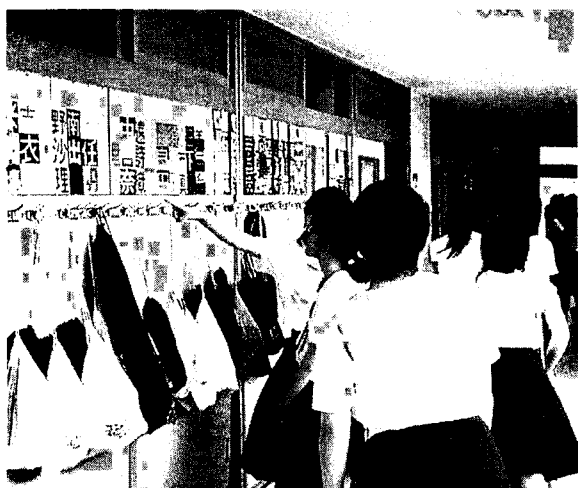


図1 廊下に展示された作品を観る生徒たち



図2 同一生徒の作品の変遷(左から1年時、2年時、3年時)

③ 異学年間に関わるこれまでの授業実践について

昨年度まで数年間にわたって、3学年すべてで同一の教材を行う単元「レタリング表札」を実践してきている。上の学年になるに従って発展的な目標を設定し、前年度の同学年（上級生）が制作した作品を鑑賞（図1）することで、そのアイデアやテクニックを自分の制作に生かすことができ、単独で活動を行うとき以上の成果が期待できることが明らかになってきている（図2）。

さらに昨年は、実験的な研究授業として2年生の一部の生徒に1年生の授業に参加してもらい、自身の前年度作品を解説してもらった授業を行った。上級生の作品の鑑賞については、これまでは単純に作品が掲示された廊下を往復し、ワークシートを記入するという、作品を媒体とした間接的な異学年間交流であったが、実際にその作品を描いた本人が、工夫した点や苦勞した点を語り、質問を受けるという直接的な異学年間交流であった。身近な存在である上級生と交流することで、自分にもできるかもしれないという意欲や、真似をしてみたいという具体的な目標が出やすくなったようである。しかしそこで明らかになったのは、学習内容についての活動以前に、「自分の考えを言語としてまとめる」、「相手を目の前にして喋る」、「臨機応変に対応する」といった活動が困難な子どもの姿であった。

(2) 異学年間授業の問題点と計画の方向性

前項で述べたような現状から、美術科において異学年間授業を実施するにあたっては次のような問題点が考えられる。

- ・異学年が同じ時間、同じ場所で活動するためには時間割の調整が必要だが、他教科の授業や学校行事などの関係でその実現は難しい。
- ・美術科は1人の指導者が担当している場合が多く、単純に2クラスを合わせた授業では、生徒の人数や教室の関係でその指導は難しい。
- ・異学年間においては面識のない者同士が一緒に活動するため、活動の前段階でお互いが打ち解けるためのコミュニケーションが必要になる。しかし、現在の子どもたちの多くはそうした力が弱く、活動の態勢が整うまでに時間がかかる。
- ・子どもたちのコミュニケーション活動を向上させるためにアイスブレイキング活動を行うなどが考えられるが、授業数の少ない美術科の場合、教科の学習の前段階でそうした時間を確保することは難しい。

逆に異学年間授業を実施するにあたって、美術科ならではの特性として次のような点も考えられる。

- ・カリキュラムの編成を比較的自由に行えるため、交流活動を行う時期を揃えやすい。同様に扱う教材を比較的自由に設定できるため、異学年間活動に適した活動を行いやすい。
- ・直接的な“喋る”交流だけでなく、間接的に“作品を通した”交流を行うことができる。しかし、喋る交流が客観的に相手の理解を行いやすいのに対し、作品を通した交流では、相手の理解は受けて側の主観で行われやすい。

2. 異学年間交流授業のねらいと位置づけ

前述のような問題点や美術科の特性から、今年度の異学年間授業の計画にあたっては、現状に適し、問題の解決を図ったものであることを前提とした。研究という特別な形でだけ実施可能なものではなく、通常の授業活動においても実践の可能性が高いものであることが重要だと考えたからである。具体的な方向とそのねらいは、以下のようなものである。

- ・同じ時間、同じ場所での交流活動は行わない。

時間割調節の回避と、多人数指導にならない通常の授業形態の維持が期待できる。

- ・同じ時期に同時進行で活動を行う。

双方の活動に関係を作りやすく、関わりが深まりやすいと考えられる。

- ・直接的な交流活動は行わず、互いの間接的な交流活動によって相手学年の活動に関わる方策を考える。

自己主張がしにくい緊張感の回避と、アイスブレイキング活動にかかる時間の回避が期待できる。

どちらか一方の学びに関わるのではなく、双方の学びが期待できる。

- ・自己表現、他者理解といったコミュニケーション力の育成を図る活動にする。

学習活動の習得だけでなく、その活動を通して二次的にコミュニケーション力を図る必要がある。

- ・言語による表現（言葉）と非言語による表現（作品）を通じた自己主張を行う。

言葉による表現活動によって、作品制作による表現活動をより具体的にすることができる。

こうした方向を前提として異学年間授業の計画を進め、具体的に次のような単元および教材を実施することにした。

3. 異学年・異校種間交流授業の単元構成、指導計画、実践内容など

(1) 単元名 Tシャツプリントのデザイン

(2) 教材の概要について

- ・実施学年は1年生と2年生とし、異学年間交流の活動とする。(内容については次項参照)
- ・活動はそれぞれ同じ時期、同時進行、同じ教材で行うが、時間割の変更が必要になる同じ時間、同じ場所での共同活動は実施しない。
- ・制作活動の基本は白地のTシャツに何らかのデザインを施すものとする。デザインについては原画を制作し、完成した原画をスキャナーでパソコンに取り込んだあと、アイロンプリント用紙で出力して転写する。
- ・原画の制作については、B4サイズのイラストボードに水性絵の具（アクリルガッシュ）を中心に制作し、その他の描画用具（材料）や表現技法については生徒の発想を期待する。
- ・作品のテーマおよびその表現方法については、生徒の自由な発想に基づく。ただし既存のキャラクターを描いたり、写真をそのままコラージュ的に使用したりすることはしない。

(3) 異学年間交流について

今回の単元では1、2年生が同じ教材を同じ時期に扱いながら、それぞれの学年が相手学年の活動に関わる方法を試みている。ただしそれぞれの授業曜日は異なるため、同じ時間、同じ場所で直接的に関わる活動は行わず、例えるならば時空を超えた交流ということになるだろうか。その具体的な内容については、前章（2.異学年間交流授業のねらいと位置づけ）を踏まえたうえで、以下のように計画した（図3）。

- ・抽選くじで1、2年生各1名ずつの任意のペアを作り、交流を行う。その際、制作が終了するまでペアの相手については一切明かさないことにする。相手が誰であるかを知らないことで無用の感情移入を避けることができ、誠実な態度で交流ができると考えた。
- ・活動中の1年生の活動について2年生が支援、助言を行う形をとる。1年生から2年生への発信はワークシートの文章（言語的表現）と制作中の作品（非言語的表現）により、2年生に対して自分の考えをまとめ、わかりやすく制作の意図を伝える努力をすることで、「自己主張」の力を育てることができると考えた。2年生は1年生からの発信（解説や質問および実作品の制作経過）を受け、それに

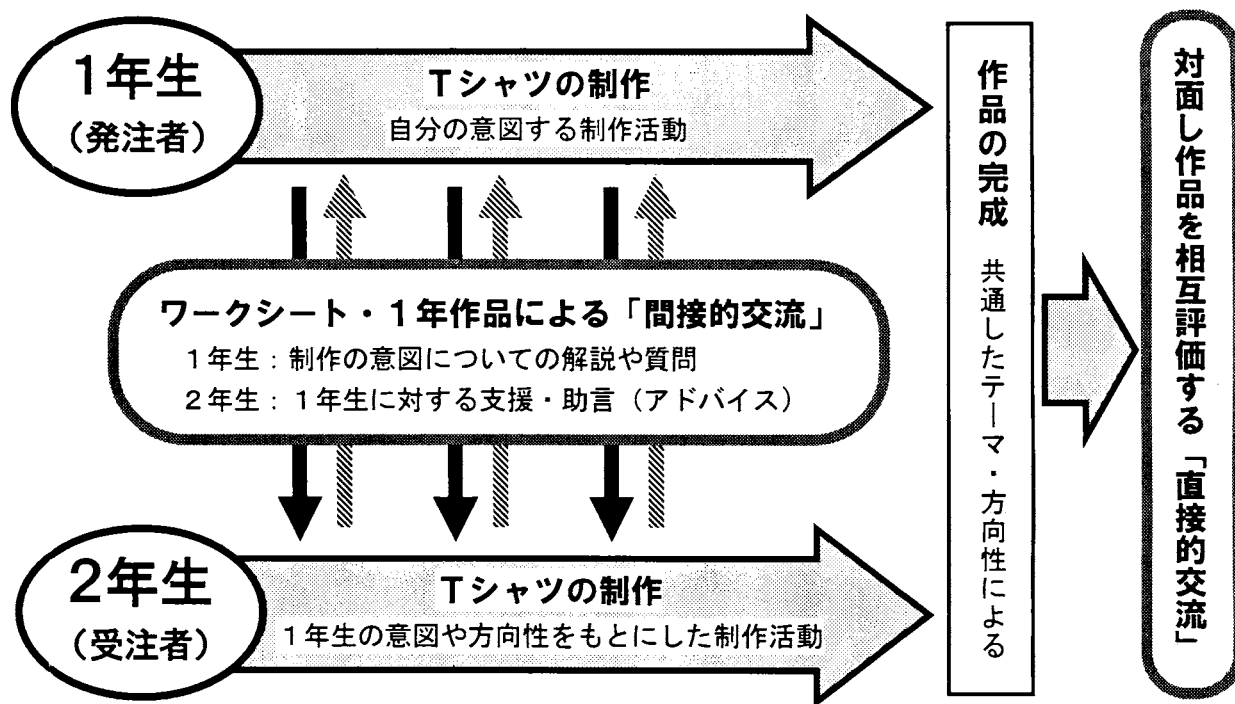


図1 廊下に展示された作品を観る生徒たち

対してワークシートの文章（言語的表現）による返信を行う。その際に1年生の考えや制作の意図を否定、非難するのではなく、そのよさを汲み取り、さらによりよいものにするための支援の意識を持つ努力をすることで、「他者理解」の力が育つと考えた。

- ・1年生の制作活動についてはあくまでも1年生自身が主体で、2年生の支援・助言にどの程度共感し参考にするのかの決定は1年生が行う。それに対し2年生の活動は1年生の意図や方向性をもとに展開するものとし、発注者としての1年生に対し、受注者（デザイナー）としての立場で制作にあたる。このことで、より相手の考えを理解しようとする姿勢が強化され、積極的な情報収集を求めることになると考えた。
- ・制作が進み、1,2年生の双方の作品が完成したところで、初めて同じ時間、同じ場所での交流授業を行い、対面の場「直接的交流」を作ることにする。事前に「間接的交流」を行ってきていることで、初対面の場合よりもスムーズな交流活動が展開されると考えた。

4. 異学年・異校種間交流授業を実践した成果や課題

授業については現在進行中であり、その成果や課題についてはあらためてまとめることになるが、現時点で明らかになっているのは、子どもたちが具体的に特定できない相手に対して、予想以上に誠実な態度で向き合おうとしている点である。その理由と検証についてはこれからの課題だが、考えられる理由の一つとして、携帯電話やインターネットを日常的に活用している現在の子どもたちの姿があるように思う。メールや掲示板への書き込みといった形で、特定できない関係の相手に対して自己表現することは、時に問題となる場合もあるが、直接的交流の力が弱くなっている姿の裏側で、抵抗なく間接的交流を活用できる力を身につけているのではないかと感じている。

今後、活動の中で行われるやりとりをまとめることで、そうした可能性について明らかにできればと考えているところである。